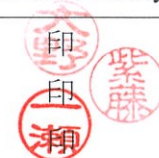


## 論文審査及び最終試験又は学力の確認の結果の要旨

①・乙	氏名	芦村 龍一
学位論文名	Frequency of Alcohol Drinking Modifies the Associations of Salt Intake With Blood Pressure and Albuminuria: A 1-year Observational Study	
学位論文審査委員	主査	大野 智
	副査	紫藤 治
	副査	一瀬 邦弘



## 論文審査の結果の要旨

食塩感受性は、食塩摂取量に対する血圧の反応性によって特徴づけられる。慢性的な重度の飲酒が食塩感受性を増強した報告はあるが、一般住民における飲酒が食塩感受性に影響を与えるか明らかではない。また、食塩摂取量は、慢性腎臓病の初期初見であるアルブミン尿に影響する重要な要因である。飲酒もアルブミン尿の発症要因の一つであるが、食塩摂取量とアルブミン尿の關係に飲酒が影響するか明らかではない。申請者は、製薬会社職員507人を対象に、2年間の健康診断結果を用いて、飲酒頻度が食塩摂取量と血圧、食塩摂取量とアルブミン尿の關係を修飾するか1年間の観察研究を行った。主要暴露因子は、2017年と2018年の食塩摂取量の差で、飲酒頻度は質問紙法により3群に分類した。アウトカムは、2017年と2018年の血圧の差およびアルブミン尿の差とした。多変量線形回帰モデルの結果、食塩摂取量 1 g/日増加あたり、収縮期血圧が「ほとんど飲まない」群で0.19 mmHg、「機会があれば飲む」群で0.84 mmHg、「ほぼ毎日飲む」群で1.78 mmHg上昇し、飲酒頻度依存性の關係を認めた。また、アルブミン尿も同様に、食塩摂取量 1 g/日増加あたり、「ほとんど飲まない」群で14%、「機会があれば飲む」群で17%、「ほぼ毎日飲む」群で22%増加し、飲酒頻度依存性の關係を認めた。本研究は、飲酒頻度による食塩感受性の増強、食塩摂取によるアルブミン尿の増大を明らかにし、飲酒者は血圧低下やアルブミン尿減少を目的とした食塩制限が、特に有効な集団であることを提唱する重要な研究である。

## 最終試験又は学力の確認の結果の要旨

申請者は職員健診の結果を用いて飲酒頻度が食塩感受性およびアルブミン尿に与える影響について統計学的手法を用いて検討し、頻度依存的に正の關連があることを明らかにした。発表及び質疑応答は的確で關連知識も豊富であり、研究成果を踏まえた今後の研究展開についても言及できており学位授与に値すると判断した。  
(主査 大野 智)

申請者は飲酒習慣が食塩感受性高血圧ならびにアルブミン尿に及ぼす影響を統計学的手法により検討した。得られた結果は一般健常人における高血圧や腎機能障害の予防のための食塩とアルコール摂取のコントロールの重要性を示唆しており、臨床的に重要な知見となっている。公開審査時の質疑応答も適切で、關連知識も十分であり学位授与に値すると判定した。  
(副査 紫藤 治)

申請者は一般健常人において、飲酒頻度が食塩感受性を修飾し、食塩摂取量と血圧上昇およびアルブミン尿増大のそれぞれを来すメカニズムについて、様々な交絡因子を適切に抽出し、仮説を実証した。仮説を証明するための背景と方法論を適切に論じ、発表や質疑応答も十二分に審査委員の要求を満たすものであった。  
(副査 一瀬 邦弘)

(備考)要旨は、それぞれ400字程度とする。